

前畑憲子先生の人と学問

2012年3月、前畑憲子先生は本学を定年退職された。本稿は、長年にわたって研究指導を仰いできた諸氏が先生を囲み、その対話のなかから先生の学問的営為と、その人となりを描きだそうとするものである。

先生が一貫して追求されてきた研究テーマは、マルクス恐慌論であった。このテーマは、長い歴史をもつがゆえに学界において玉石混淆の議論を抱えもっているが、先生は通説に流されることなく、常に『資本論』と向き合い、格闘される道を選ばれてきた。聞き手諸氏は常々、先生のこうした研究姿勢を目の当たりにし、先生から多くのことを学ばせていただいたはずであるが、先生の学問的到達点を座談のなかで先生から引き出せたかどうか、紡ぎだすことができたかどうかとなると、はなはだ心許ない。読者諸氏には、この点へのご配慮をお願いした上で、先生への感謝の念を込めて本稿を先生の「人と学問」に代えさせていただくことにしたい。

座談会は2012年11月18日、前畑先生はじめ、東洋志、堀内健一、松下和輝、川崎志帆、飯島寛之、宮成則生、清水良樹、旗持孝寛の計9名の出席のもと実施された。なお、以下では編集の都合上、発言者の氏名はA、Bというように記すが、必ずしも実際の発言者とは対応していないことをお断りしておく。

(以上、文責：飯島寛之)

I 『資本論』，そして久留間鮫造先生との出会い

A) みなさんご承知のように、前畑先生が『資本論』と向き合うようになったきっかけ、あるいは研究生活に入られたきっかけについては『立教経済論叢』（第76号、2012年3月）の方に先生ご自身が詳しく書かれています。先生は第二部第三篇及び第三部第三篇と恐慌について精緻な理解に努めてこられたわけですが、『論叢』に書かれていないことを中心に、先生が恐慌または恐慌論に関心を持ち、それをずっとテーマにしてこられた理由についてお聞きしたいと思います。

前畑) 大学院に進んだころから、恐慌論を研究テーマとするという明確な問題意識があったわけではなかったと思います。とにかく学部のゼミで歯が立たなかった『資本論』を勉強したいというのが大学院への進学のも動機であったことは『論叢』に書いた通りです。今振り返ってみれば、マスターのころは、『資本論』はもちろんですが、『資本論』第二部第三篇をもとに資本主義の「自動崩壊論」を説いたローザ・ルクセンブルクに興味があり、いわゆる再生産論争の周りをうろろろしていたのですが、これが恐慌研究の出発点の一つであったと思います。『資本論』第二部第三篇に恐慌の究極の根拠としての生産諸力の無制限的発展傾向と労働者の消費

制限について解明されているのかどうか、論じられているとしてそれはどのようにか、いわゆる内在的矛盾に関する論議にかかわらざるを得なかった。これが恐慌論に関心をもったひとつであったと思います。さらに、このほうがずっと大きな理由かもしれませんが、マスターから久留間先生のところで勉強することができたということ。先生は大きな疑問を持ってと常におっしゃられていました。それが効いたのではないが、こんな風に思います。

B) そもそも『資本論』について学びたかったというように『論叢』に書かれていたかと思うんですが、それはどのようなきっかけだったのですか。

前畑) そうですね。これも『論叢』に書きましたが、中学生くらいの時に60年安保があり、毎日毎日デモの様子が報道され、世間が騒がしくなっていました。東北の地方都市にいてもそういう空気は伝わってくるわけですが、その時に、デモをしている勢力はどのような考え方をしているのだろうか、それが最初の疑問でした。高校の時に初めてマルクス主義に出会ってこれなんだと思いました。それからいろんな活動をし始めるのですが、当然にも資本主義はおかしくて、社会主義が理想的な社会なのだと思って活動しているのですが、しかし、実際のところは「社会主義」国同士が国境をめぐる軍事衝突をしたりする、そういうことが目に見えるような具合になってくる。そうすると、活動の前提になっていた資本主義、社会主義についての自分の考え方もきちんと検証しなければならない、ということになる。このように整理して考えたわけではなかったと思いますが、今考えるとそうやってよいように思います。とにかく勉強しよう。『資本論』を勉強しなければならない、と。これが大学進学のも動機になりました。

C) それで先生は学部2年生の時から、大島清先生のゼミで『資本論』を読み始めたのですね。前畑) そうです。『資本論』を読むのが本当に大変で、わからなかった。読めなかった。「こんなにも読めないものか」ということに我ながらびっくりしましたね。

D) わからない場合は、僕の場合は参考書に頼っていこうということもあるのですが、『資本論』そのものとじっくり付き合うような読み方が憲子先生の読み方だと思うのですが、そのへんのところはどうか。

前畑) とにかく自分の頭で考えなければと思って『資本論』を読もうと思ったわけですから。もちろん、当時は今よりもたくさん参考書が出ていましたから、読んではいましたが、それで『資本論』の一つ一つの流れが分かった、ということにはならなかったですね。『論叢』にも書きましたが、一行一行が分からなかった。主語がどこで述語がどこか、これさえもあやふやになってしまう。どうして小学5年生と思ったのか今全く思い出せないのですが、小学5年生の国語からやり直さなければならない。そんな具合でした。

C) 先生の学風といいますか『資本論』を徹底的にきちとやるというのは、ルーツをさかのぼれば学生時代からそういうポリシーっていうのはあったわけですね。

前畑) 性格もあつたと思うのですね。一から積み重ねていかないと分かったという具合に行かなくて。気持ちが悪いというか。生産性が低いのです。

C) 大島先生から影響を受けたということはあまりなかったんですか。

前畑) そうですね。大島先生は(学部)ゼミの最中は全然お話にならないのですが、例えば労働の二重性がわかるとその後の『資本論』のどのような問題が解けるのか、ということを経ミの最後にぼつんと言ってお帰りになる、それで終わり。当時、その解答は全くわかりませんでした。ですから、こちらが影響を受けるような器の状態にはなかったというほうが正しいでしょう。

ゼミの選択も大島先生がどのような研究をされていらっしゃるのかということよりも、とにかく『資本論』を読んでいるゼミを選択したのです。当時、ゼミで『資本論』をやっているのは上杉捨彦先生のゼミと大島ゼミだったと思います。上杉ゼミは新ゼミ生を抽選で選んでいました。学生は等しくゼミに入る権利を持っているのだから、試験をして入れる入れないを決めるというのはおかしいのではないかというので、抽選だったんですね。ですが、抽選で落ちるっていうのも嫌だなと思っていて、大島ゼミの試験を受けたのです。久留間先生との関連でいえば、二年生ぐらいの時には『価値形態論と交換過程論』を経済史研究会で勉強していました。だから鮫造先生のお名前はもちろん知っていました。どのくらいすごい先生かはわかりませんでした。大学院に入ってすぐに、大島先生が鮫造先生の所に行きなさいといってくださいだったので、なにせ指導教授の大島先生の先生ですから、恐る恐る伺ったわけです。

A) 先生その後の研究の方向性を決める上で重要な姿勢はマルクスがまず何を課題にしているかということをはっきりさせながら読んでいくということですが、こうした姿勢はなによりも鮫造先生から学ばれたと『論叢』に書いてあります。全体として、久留間先生からどのようなことを学ばれたのでしょうか。

前畑) 久留間先生を前にして、私なぞいわば猫に小判状態だったわけですが、先生から学んだこととしてまず挙げるとすれば、なによりも『資本論』では何が書いてあるのか、これをしっかりと正確に理解すること、これが議論の出発点であることですね。『資本論』を批判するにも「発展させる」にも、まず、何が書いてあるのか、これなしにははじまらないということ。いいかえれば、今Aさんが言った、マルクスが何を明らかにしようとしているのか、その課題を明確にすること、それによって、そこでの方法的限定もおのずと明らかになるからです。人は『資本論』に対するこのような鮫造先生の向き合い方をもって「解釈学」であるというのですが、鮫造先生の名著『価値形態論と交換過程論』を読めば「解釈学」がいかに重要であるか、よくわかるかと思えます。そしてまた、この名著をもって単なる「解釈学」だという人はいないと思うのです。

恐慌理論の基礎理論としての『資本論』を読む場合でも全く同じだと思います。

A) 前畑先生の書かれたものを読むと、基本的にはごっちゃになっている問題を交通整理じゃないですけど、何が課題かということをもう一回整理しながら解き明かしていくということ、これが大きな特徴かと思うんですけど。

D) 先ほど『資本論』を研究される際に、研究のスタイルについて久留間先生との関係でお話しただいたんですが、もうちょっと絞って、久留間恐慌論の特徴というのは従来の研究とはどこが違うのかということと、それと先生の恐慌論とのつながりについてお話ししたいのですが。

前畑) 私の数少ないアンテナでキャッチした限りでのことですが、久留間先生の恐慌論の特徴は『マルクス経済学レキシコン』(大月書店、1972年、1973年、1974年、1975年)の恐慌篇を見れば明らかであると思います。従来の恐慌論との関係でいえば、例えば、恐慌の抽象的可能性の内容規定を従来の取り扱いのように『資本論』第二部三篇だけに求めるのではなく、第二部全体にわたって論じられているとする点や、恐慌の「必然性」という項目ではなく、恐慌の可能性の現実性への転化(恐慌の原因)とした点などあげられるかと思いますが、従来の恐慌論と大きく異なっているのは、恐慌を引き起こす資本主義の矛盾の捉え方だと思います。例えば、ある「基準」を置いて、その「基準」とは理想的な資本主義の進行を想定した「基準」かもしれませんが、あるいは超歴史的に理想的な経済の進行を「基準」としたものかもしれませんが、それらの「基準」からの乖離をもって恐慌を引き起こす矛盾の進行である、あるいは矛盾の累積である、というとらえ方に対して、久留間先生のこの矛盾の捉え方は、「生きている矛盾」というとらえ方でした。すなわち、恐慌の抽象的可能性が資本のもとで受け取る内容規定を明らかにし、それらの内容・資本主義的生産を構成する諸契機がどのような矛盾によって恐慌に至ることになるのか、これをとらえるときの視点、矛盾の捉え方、この点に大きな特徴があると思うのです。資本はその本性からして労働者から最大限の剰余労働を取得し、既存資本の価値の増殖を追及していかなければならない。これは一方では生産諸力を絶対的に発展させようとする資本の傾向として現れ、また同時に、この資本の本性は生産の資本主義的制限を措定せざるをえない。この矛盾は、一方では制限を措定すると同時に、他方ではこれを絶えず乗り越えようとする「生きている矛盾」であって、この矛盾が恐慌の可能性を現実性に転化させるのだ、という捉え方です。この過程を明らかにしようとしたのが、『レキシコン』「恐慌」であることは皆さんもご存じのことだと思います。

D) 恐慌を引き起こす矛盾の捉え方に久留間恐慌論の特徴があるというお話でしたが、そうした特徴というものは、『資本論』の理解の仕方から生み出されたものといってよいでしょうか。前畑) そうですね。「生きている矛盾」という言葉は、『資本論』からではなく、『経済学批判要綱』にあります。そして、久留間先生が『レキシコン』の「乗」で、この生産力の無制限的發展傾向と生産の制限措定という観点が「矛盾の累積と爆発」そして「諸契機の独立化と統一の回復」の観点と並んで、恐慌の解明にとって重要な観点であるということに気づいたのは戦後『経済学批判要綱』を読んでからだ、と述べられているように、先生の恐慌論の特徴というものは『資本論』の理解の仕方からだけ導き出されているというわけではなく、マルクス経済学の総体の厳密な理解からというべきだと思います。しかし、このような矛盾のより具体的な

展開というのは、『資本論』の第三部第三篇「一般的利潤率の傾向的低下法則」にあると思います。特に、現行版の第三篇第15章第2節にあると思うのですが、この内容を含むこの章全体を正確に理解するということなしには、『レキシコン』「恐慌」のあのような全体的な組み立て、すなわち、「生き活きとした矛盾」を特徴とする恐慌論の組み立て——「ただ潜在的に矛盾があるというのではなくて、それがアクティブに活動する、対立的な要因が実際に相反する運動をする、そしてそれがある程度まで進むと極度の緊張が生じ、矛盾が爆発することになる」という恐慌把握——はあり得ないと思います。ところが、通常、第15章第2節の内容については、それぞれの恐慌論の組み立ての中に十分に生きてはこない。その理由は、一つには、第2節部分は非常に理解が困難であるということ、第三篇全体の十分な理解を必要とすることをあげられるかと思えます。それと関連しますが、二つ目には、15章は、その第1節と第3節とを対立的に、すなわち、第1節では「商品」過剰論について述べられており、他方、第3節では「資本」過剰論について述べられていると対立的に把握され、そのどちらに拠って恐慌論を展開するか、というような学界の理論状況がこの第2節の理解を困難なものとし、また、久留間先生のような問題の立て方を阻んできたということができるとかと思えます。鮫造先生はこうした学界の論争から問題を立てて、自分の見解に当てはまる『資本論』の部分読みをしたり、都合のよい読み方をする、ということとはまったく無縁でした。「本当のことはなにか」、これを求めて『資本論』に向き合う、それが、久留間恐慌論の特徴を生み出したとっていいかと思えます。

F) いま先生がおっしゃられた、「本当のこと」を明らかにするという一点で『資本論』に向き合う、という久留間先生の姿勢と関連するかと思うのですが、例えば労賃騰貴の問題ですね、絶対的過剰生産のところでそれが恐慌の一契機としては重要な位置づけを持つと。しかし労働運動の立場からすると、その労賃騰貴、それが恐慌につながるということはあんまり都合が良くないわけですね。しかし『資本論』に即してきちんと研究するということになると、そこはやっぱり認めないといけないというか、現実をちゃんと見るということになりますよね。そこはどうなのでしょう。従来の恐慌論との違いということでは。

前畑) ご承知のように、恐慌への転換点を示す「資本の絶対的過剰生産」については、現行版『資本論』第三部第三篇第15章の第3節で論じられているわけですが、いま話をしたように、学界では「資本の絶対的過剰生産」の議論を重視して恐慌を説明する見解を資本過剰論といわれているわけですが、その見解の代表者として宇野弘蔵先生がいらっしゃる。他方、第1節のいわゆる剰余価値の実現論にもとづく議論、労働者の消費制限と生産諸力の無制限的發展傾向との矛盾を重視して恐慌を説明する見解とが対立しているわけですが、こうした対立の背後にいまFさんがいった、労賃騰貴が恐慌発現の一契機になるということ認めたくない、という心情が後者の見解にはあることは間違いがないだろうと思います。そこで、「資本の絶対的過剰生産」についてマルクスは、それを「仮定法」で述べているのであって、つまり、現実にあ

り得ない事態であることとして述べていたのだ、といった議論がおこなわれることになるのです。しかし、繁栄期（その思惑的最盛期）には、つまり恐慌の直前には労賃の騰貴が生じるといこと、その程度はいろいろあるにしても、これは事実です。マルクスはこれを次のように言っています。「……明らかに、資本主義的生産は人の意志の善悪には係わりのない諸条件を含んでおり、こうした諸条件が労働者階級のかの相対的繁栄をわずかの間しか、しかもいつでもただ恐慌の前触れとしてしか許さないのである。」（『資本論』，S.410）では、なぜに資本主義的生産は「労働者階級のかの相対的繁栄」——労賃の通常以上の騰貴——を「恐慌の前触れとしてしか許さない」のか。それは、この生産が生産者大衆の生活の向上を目的とする生産ではなく、利潤の獲得を目的とした生産だからです。つまり、この事実は資本主義的生産の敵対的性格を端的に表しているわけです。

久留間先生は、先ほども言いましたが、学界的状況から問題を立てるといったことは一切なさなかったですし、もちろん政治的諸関係に左右されるということも皆無でした。当然ながら「資本の絶対的過剰生産」について疑問を呈したことはなかったと思います。ただし宇野先生との相違を言えば、そしてそれは大きな相違なのですが、先生は、この概念を、利潤率の傾向的低下法則の諸契機の対立的運動の中に、したがって、「活き活きとした矛盾」の一契機として位置付けているわけですが、宇野先生はこの概念をこの法則と切り離してしまった、という点で大きな相違があるということができてでしょう。

C) 僕も80年代に先生のサークルで先生から話聞いて、一つ新鮮だったのはその問題です。今でも言われてますけど、賃金上げれば景気が良くなるという、これがやっぱり労働運動のスローガンで今でも生きているわけですよ。賃金上げれば上げるほど景気が良くなるんだ、だから賃金上げることは日本経済を向上させることなんだっていうのは、今の労働運動のスローガンになっている。多くの現場の人たちがそれでやっている。僕なんかもそういうような意識を持っていたところで先生の影響も受けてきて、やっぱりそうじゃないっていうのはものすごい新鮮でした。で、一見それは運動と関係ないようにみえてBさんもおっしゃるように資本主義を根本から問うことになるんだよね。そのことを久留間先生も憲子先生も、すごく新鮮なメッセージだった。僕なんかの印象だと当時はやはり講座派の影響がすごく大きかったから。80年代ぐらいではまだ。世の中を変えたいと思うマルクス経済学だったら講座派っていう。で、講座派の果たした役割はそれなりにあったからね。でもそのバイアスっていうのはやっぱりF君が言ったようにあったわけで。それで憲子先生と久留間先生のものを読むと、驚くし最初は違和感もあるけれどもやっぱりそれは非常に衝撃的で。そして山田盛太郎さん系と論争になるわけですが、その経過は大変ショッキングでスリリングで、日本のマルクス経済学の主流とは違う、『資本論』と格闘して真っ当なものを出していったというすごい鮮烈な印象というのがありましたね。

前畑) 賃金を上げれば景気が良くなる、ということであれば、資本主義的生産には何の問題も

ない、ということになりませんか。労働者も「繁栄」し、「景気が良くなる」というのは資本の蓄積が進行するというわけですから、資本も「繁栄」する。ウィン・ウインの関係ですね。労賃騰貴とは利潤の減少であり、したがって、「恐慌の前触れ」であって、そこに資本主義的生産の敵対的性格が端的に表れる、という把握とは全く逆のものになってしまっているように思います。このことは階級闘争としての賃上げを否定することとは全く違うのだ、ということとは自明だと思うのですが。賃金の上昇は、確かに消費の増大につながるでしょう。そしてまたそれは資本にとって十分な需要として映り、蓄積が進行します。そしてさらに労働力の吸収が進むのですから労賃が上昇し、利潤が減少する。もし、資本の有機的構成を高度化させて労賃上昇を避ければよいのだ、という人がいるとすれば、それはそれで利潤率を低下させる要因なのだ、ということをおぼえておられるとしか言いようがないわけです。つまり、資本主義的生産とは、どこまでも利潤のための生産だということによって、資本の側も労働の側もウィン・ウインの関係が続くなどあり得ないのです。

Ⅱ 『資本論』第二部第三篇と恐慌の研究

A) そろそろ次の問題に入りたいと思います。先生の研究のところでは、まず二部三篇について伺いたいと思います。二部三篇についての先生のご論考は、大きく2つのグループに分けることができると思います。一つは、二部三篇と恐慌との関連を研究した先生の初期の四つの論文。そして二つ目はその後書かれた二本の論文ですが、二部三篇現行版第21章「蓄積と拡大再生産」のマルクスの草稿である、第8草稿の研究です。このようにグループ分けをしてよいとして、まず、第一のグループの諸論考をお書きになった経緯と伺いますか、それらの関連と伺いますか、その辺からお話をいただければと思います。

前畑) 皆さんも承知のことと思いますが、『資本論』第二部二篇でのエンゲルスが脚注とした注「32」をめぐる論争があります。すなわち、マルクスが「……すべての現実の恐慌の究極の根拠」と呼んだ生産諸力の無制限的發展傾向と労働者の消費制限、いわゆる「内在的矛盾」は第二部第三篇で取り扱われているかどうか、取り扱われているとしてどのように扱われているのか、この問題をめぐる論争です。通常、注「32」で「これは次の篇ではじめて問題になることである」とされているのだから、この問題は二部三篇で取り扱われる問題なのだと思われるのですが、ではこの篇でどのように取り扱われているのか、いろいろ説はありますが、未だ、説得的な議論には至ってはいないと思います。確かに資本家の消費であろうと労働者のそれであろうと、社会的総資本の流過程の、したがって、社会的総資本の再生産の一契機であることには間違いがありませんし、均衡の一契機です。しかし、この矛盾の他方の要因であるところの生産諸力の無制限的發展傾向について、この篇で取り扱われているかどうかといえば、そもそもこの篇の課題からして論じ得ない事態だと思うのです。もちろん資本の有機的構成を高

度化させた表式を作ることは可能ですが、そこでも問題はのもとでどのように社会的総資本の価値と素材における補填がおこなわれるかが問題になるわけで、個人的消費と矛盾する、といったことが問題になるわけではないのです。では注「32」についてはどのように考えればよいのか、第二部の諸草稿が刊行されましたので、それらを踏まえてもう少し考えてみたいと思っておりますが、内容的にみてこの問題がこの篇に属すると考えるのは無理があると考えています。

ところで、『資本論』第二部第三篇の課題と恐慌論との関連についての一考察——富塚良三氏の『均衡蓄積率の概念』の検討」から「再生産表式と有機的構成高度化」にいたる5本の拙稿は、この論争を背景として、いま見たいわゆる「内在的矛盾」の問題を部門間比率の問題として提起された富塚先生の「均衡蓄積率」という考え方——二部三篇の拡大再生産(21章)の分析を発展させたものとして学界において高い評価を得た考え方——の批判的検討、そしてこのような考え方の淵源であると私には思われたレーニンの「第 部門の独立的発展」についての議論の批判的検討をその内容としています。

富塚先生の「均衡蓄積率」の考え方については、『レキシコン』の恐慌の抽象的可能性の内容規定の「9 単純再生産から拡大再生産へ移行する際に生じる、社会的生産の二大部門の間の比率の変化の必然性と、この変化の際に生じる困難 [このことは、必要な変更を加えれば、蓄積率の変動一般——すなわち上昇並びに低下——の場合についても言いうるであろう]」の解説をしている「棗」において大谷先生が蓄積率と部門間比率との関連について「方法的に間違った」議論だと批判され、それを契機に富塚先生から久留間先生への質問状が寄せられ、久留間先生がそれに応えられる、といった形ですでに議論がされていたのですが、もう少し富塚先生の議論に沿う形でこの概念を検討しようと思い、最初の論文を書いたのです。この問題に私が興味をもったのは、富塚先生の恐慌論研究は学界の中で大きな影響力をもっていた、したがってどのような議論をしているのか、これを知りたい、ということもその一因ですが、蓄積率と部門間比率との関連、前者が独立変数で、後者がその従属変数である、というマルクスの考え方と富塚先生の考え方の相違がどこから生み出されているのか、どうもしっくりこなかったのです。その理由は私が拡大再生産の分析をいわゆる「余剰生産手段」($(v+m) > c$)から始まる教科書的叙述に慣れ親しんでいて、マルクスのそれを十分に理解していなかったからではないかということに気付いたのです。「余剰生産手段」がなければ社会的総資本の拡大再生産は不可能です。このことは自明です。しかし、そもそもこの「余剰生産手段」は如何にして確保されるのか、第 部門の拡大によって。その拡大のための「余剰生産手段」は如何にして。このように蓄積の前に蓄積を前提するならばおよそ蓄積は不可能である、ということにならざるを得ないでしょう。もちろんより多くの生産手段の存在を前提せずとも現存する生産手段と労働力とで従来の時間以上に稼働させることによって「余剰生産手段」を手に入れるということも可能ですし、実際、マルクスは『資本論』第一部第七篇ではこの生産過程の弾力性による問題の解決を示していたのです。しかし、これには限度があります。この要因を捨象す

るならば、どのような解決策があるのか。つまり、蓄積の前に蓄積を前提せず、如何にして「余剰生産手段」を確保するのか、これがマルクスの拡大再生産の「物質的前提」あるいは「物質的基礎」の議論であったわけです。「物質的前提」について、マルクスは次のように書いています。「単純再生産の与えられた諸要素の量ではなくてそれらの質的規定が変化するのであって、この変化が、そのあとに続いて行われる拡大された規模での再生産の物質的前提なのである。」(大谷禎之介「『蓄積と拡大再生産』(『資本論』第二部第21章)の草稿について(下)」(『経済志林』第49巻第2号, 8頁)そして「物質的基礎」についても「.....年間生産物の価値の大きさは同じであって,その機能配置が拡大された規模での再生産の物質的基礎 [Basis] をなしているだけである。」(同上, 10頁)と書かれてあります。

蓄積を前提しないのですから、価値量は単純再生産(部門 m) のままで、しかし、部門 m での生産の拡大のための「物質的基礎」を獲得するためには、部門 m の「質的規定」が変化する必要があり、これが「そのあとに続いて行われる拡大された規模での再生産の物質的前提」だということです。どのような変化か、それは、部門 m の一部が部門用生産手段から部門用生産手段に変化すること、すなわち、部門 m の剰余労働の具体的支出のあり方の変化を必要とする、というのです。しかし、それは部門 m での c の一部の販売不能という困難が生じることになります。つまり部門間比率の変化が必然化されるわけです。ここでの問題の立て方は、すなわち、蓄積を前提せず如何にして蓄積のための物質的基礎を獲得するか、ということ、いいかえれば単純再生産(蓄積率 = 0) から拡大再生産(蓄積率 = $+\alpha$) への移行がおこなわれうするには、社会的再生産の諸条件はどのように変化しなければならないか、というものでした。蓄積率を独立変数とし、部門間比率をその従属変数として、問題がたてられているのです。ところが、「物質的前提」および「物質的基礎」についてのマルクスの議論は以上の問題の解決として与えられているのだ、ということを見過し、拡大再生産の分析をいわゆる「余剰生産手段」から始めるのが通常的理解からは、こうしたマルクスの問題設定とその解決をも理解することはできないだろうと思います。実際この点は、久留間先生の『レキシコン』での上記の項目において初めて明示的に取り上げられたものだったのです。『資本論』をきちんと読むということはこういうことであつたのかと目を開かれた思いでした。この問題が腑に落ちて、富塚先生の「均衡蓄積率」の概念を検討してみよう、と思ったわけです。

D) この「均衡蓄積率の概念」の批判をされた際に、生産と消費との矛盾を部門間比率の問題として論じる、という方法は、レーニンの「第 m 部門の独立的発展」の考え方にその淵源があると自覚されていて、それでいつか批判したいというお考えがあつたのでしょうか。

前畑) そうですね。第 m 部門の独立的発展という事態をそもそも二部三篇で取り扱うことの是非の問題があります。つまり、部門 m からの需要を離れて第 m 部門が独立的に発展していくんだというのですから、これは競争の問題なのですね。したがって、二部三篇ではおよそ取り扱うことのできない問題だと思うのです。この点は、先ほどの論文でも書きました。ところが、

レーニンはこの問題をこの篇の問題として扱い、さらにこの過程に生産と消費の矛盾があるのだということです。では、どのような論理でそれを述べているのか、これをレーニンの市場問題に関する著作やナロードニキの主張、合法マルキシストのそれ、あるいはそれらの論争の背景など調べたのです。「生産と消費との矛盾について」はその論文の一部です。レーニンはナロードニキが『資本論』第二部第三篇を使って、ロシアにおける資本主義発展不可能論を主張したのに反対して、彼らがそのように主張するのは、 $v+m$ のドグマにとらわれているのであって、二部三篇はまさにこのドグマの批判なのだから、ここでは彼らの主張とは反対の結論、つまり剰余価値の実現不可能とは反対で、不変資本 c の存在を認めれば、それによって剰余価値は実現できるという結論が出てくるのだ、と主張しているのです。そしてまた、合法マルキシストの無矛盾的発展の主張に対して、この第 部門の独立的発展こそ生産と消費との矛盾の表れなのだということによって、ナロードニキと合法マルキシストとの両面批判をするわけです。ところで、なぜ $v+m$ ドグマから剰余価値実現不可能論が出てくるのか、そしてまた c の存在を認めることがなぜ剰余価値は実現できる、という主張につながるのか、これらの論理を批判するとともに、そもそも剰余価値が実現できるかどうかを二部三篇で論じることそのものがおかしいというようなことを論じたわけです。

D) 鮫造先生もそれに関して折に触れておっしゃっていたのですか。

前畑) 鮫造先生はどうですかね。「市場問題」に関連するレーニンの諸論考を先生はもちろんお読みになってますし、若いときにお考えになったことがあるんじゃないかと思いますけど、そういう話をしますと、「まあレーニンはあのときまだ二十歳くらいだからね。若いんだよね。」とおっしゃっていました。つまり、学術論文として読むべきかどうかとおっしゃっていたのだらうと思います。

E) 久留間先生は『帝国主義論』のほうはわりと評価をされていたということですか。

前畑) そうですね。ローザと比較して、やっぱりさすがだねという話をしていましたね。

E) 先ほど学会で報告された「生産と消費との矛盾について」はレーニンについての論文の一部だとおっしゃられていたように思いますが、その論文全体は出されなかったのでしょうか。

前畑) 当時、ある出版社から論文を集めて出さないかと言われていて、そこに入れるつもりでしたが、そして、結局のところ、出しそびれてしまったのですが、そのうち、長々と書いたその原稿がどうにも見つからなくて。何度かの引っ越しの際に紛失してしまったのか、キチンと探せば出てくるのか……。ひどいですね。(笑)

Ⅲ 『資本論』第二部第8草稿の研究

A) 二部三篇に関連する先生の諸論考のうち、前半の5本の論文についてはだいたいお話を伺ったわけですが、第二部第三篇現行版第21章「蓄積と拡大再生産」のマルクスの草稿である第

8稿の研究に関する2本の論文についていかがでしょうか。

前畑) 『資本論』第二部第三篇第21章「蓄積と拡大再生産」の部分は、マルクスがその最晩年に書いた、第二部の諸草稿のうち最後の、『資本論』の諸草稿の最後の草稿である第8稿からなっています。皆さんもすでにご存じのことと思いますが、現行版の第21章はエンゲルスがこの第8稿を編集して出来上がったものです。各節区分、それらの表題もエンゲルスのものであって、第8稿のうちこの章に該当する部分の紹介と翻訳が1981年に大谷禎之介先生によって出されるまで、この章はエンゲルス編集の現行版しか見ることはできませんでした。そして、それをもとに恐慌の問題を含め、諸問題について議論され、種々の論争が展開されていたわけです。エンゲルスは編集に際してマルクスの草稿を「できるだけ原文のとおり再現し、……その解釈にほんのわずかも疑問の残った文章は、むしろまったく原文通りに印刷」という方針で編集し、したがって彼の「書き換えや書き入れは……ただ形式的な性質のものばかりである」(『資本論』第二部、S.7)と述べています。確かに第8稿でのマルクスの論理の運びを念頭に置いて現行版を読めばマルクスの草稿を再現しようとしたエンゲルスの苦勞の跡が分かりますが、マルクスのこだわりが、したがってこの章の筋道が読み取りにくいものになっていることは否めないと思います。

ただし、大学院のゼミ等で一緒に勉強したこともあったかと思いますが、8稿を読み切るのもこれまた大変です。マルクスの最晩年の草稿ですから、表式作成の際にはたくさんの計算間違いをしていますし、とくに「5)部門」での蓄積からいわゆる出発表式まで、あるいはその後のたくさんの表式、そして、現行版で「補遺」とされた部分等、全体の流れをとらえきるのはなかなか大変です。特に、「5)」の部分でマルクスのいう「一つの新しい問題」とは何か、これを明らかにしなければいわゆる出発表式の設定の意味も、また私にとっては全体の流れもわかったというわけにはいかなかったのです。大谷先生の第8稿についての論考が「経済志林」で発表されてからすでに10年ほどたったのですが、多分90年前後にはこの「一つの新しい問題」とマルクスが言った問題がおおむねわかり、第8稿の当該部分の全体の流れが腑に落ちた、という段階になっていたと思います。当時、自分の理解をそれとして論文にまとめるというつもりはありませんでした。が、八尾さんが86年、87年に第8稿についての論文を書かれていて、そこで彼が主張した「拡大再生産表式の理想形態」について学会でたびたび取り上げられ、「八尾表式」として高く評価されるようになりました。あらためて彼の論文を読むと第8稿についての全くの無理解からマルクス批判をし、そのうえでの「八尾表式」でした。これではマルクスがうかばれないと思い、『資本論』第二部第8稿「蓄積と拡大再生産」の課題と方法——八尾信光氏のマルクス批判について——を書いたわけです。

G) 八尾先生の「拡大再生産表式の理想形態」というのは、たしか年間生産物の価値総額が単純再生産表式のそれと同じで、資本構成および剰余価値率は両部門とも同一であって、しかも拡大再生産のための条件、 $(v+m) > c$ を満たしているものであったと思います。マルクス

は第8稿でいろいろ表式を作っていますが、以上の条件を満たした表式のほうが「出発表式」としては「理想形態」だ、といってもいいのではないかと思うのですが。

前畑) 表式について考えるときに重要なことは、何を明らかにするかによってその「理想形態」は異なるということでしょう。表式は問題解明の道具にすぎません。ですから、解明すべき問題がどのようなものかによって、どのような表式を利用するか、作成するか、ということは異なってくるわけです。「理想形態」ということが、両部門が均等に発展していくということが資本主義の発展にとって「理想」であってそれを表式で示すことが課題である、というものであれば、彼の表式は「理想形態」ということになるかもしれません。しかし、その場合でも、両部門を均等に発展させる蓄積率が、労働力の排出よりもその吸収がより速く進むようなものであれば、蓄積は早晚とん挫することになるでしょう。それは「理想形態」とはかけ離れたものとなるでしょう。マルクスの第8稿の当該部分つまり、「蓄積および拡大再生産」での課題は、一つには、先ほど問題にした、蓄積のための物的基礎を如何にして新たに生み出すか、そして、その際にどのような困難が生じるのかです。二つには、蓄積の際には、固定資本の償却部分の積立とその更新の場合と同じように、蓄積基金の積立と投下とが、つまり一方的 $W - G$ と一方的 $G - W$ とが資本の再生産過程にとっては必然化するわけですが、したがってまた、社会的総資本の再生産と流通にあっては現実的蓄積をする部分と可能的貨幣資本蓄積をする部分とが均衡を保つということが析出されるのですが、これが特に「5)」とした部分では、両部門の価値素材補填関係の中で部門 での可能的貨幣資本蓄積がどのように行われることになるのか、そこにおける困難はどのようなものか、これを明らかにすることであったと思います。マルクスが病気をおして苦勞しながら作成したのは、この問題の解明のための表式なのであって、資本主義的経済における架空の「理想形態」としての均等な発展経路を表示することではなかったのです。このような「理想形態」をマルクスは第8稿で追及して、遂にそれを成し遂げることができなかったのだという批判は、そこでのマルクスの課題を全く理解しない勝手な批判だ、ということをお明らかにしたつもりです。

G) 表式とは解くべき課題によって規定されるものだ、ということはおわかりました。では、「出発表式」として知られているあの表式でマルクスは何を問題としたのでしょうか。これは先生の次の論文「いわゆる「拡大再生産出発表式の困難」について——第2部第8稿における「出発表式」設定の意味——」の内容に入ってしまうかと思うのですが。

前畑) 先ほど述べた「蓄積と拡大再生産」のところでの課題のうち、第一の課題を果たしたのち、マルクスは両部門の価値・素材補填の相互補填の中で現実的蓄積（一方的 $G - W$ ）および可能的貨幣資本蓄積（一方的 $W - G$ ）がどのように行われるかの問題に入っていくのですが、その際、「一つの新しい問題」とマルクスが言った事態が生じます。それはなにかといいますと、部門 が部門 から追加的生産手段を購入（一方的 $G - W$ ）するのですが、この貨幣が部門 にとどめられ、部門 に対する需要として発動しない、という事態です。これでは

部門 での可能的貨幣資本蓄積は不可能になってしまいます。これをマルクスは「一つの新しい問題」といったわけです。

G) お話の途中ですが、部門 では追加的労働者を雇用するわけですから、この労働者が部門 の mc 部分に等しい生活手段を購入することに、したがって、それによって部門 での可能的貨幣資本蓄積が可能になる、という具合にはいかないのでしょうか。

前畑) それこそがそうはならないのです。というのは、マルクスは単純再生産において次のような想定を置いていました。すなわち、期首にある、年間総生産物のうち、 v 部分については、それを生産した労働者が後払いされた賃金で買い戻す、それによって、可変資本が生産物の形態から貨幣形態で資本家のもとに還流し、労働者は労働力として再生産されている、というような想定です。そうすると、追加的労働者は継続労働者ととともに、労働ののちに賃金を受け取り、自分たちが生産した次の期首にある年間生産物のうちの v 部分を貨幣化する、ということになりますから、今期の期首にある年間生産物のどの部分に対しても追加労働者が購買する、ということにはならないわけです。これがいわゆる「拡大再生産の困難」と言われた問題です。たくさんの論者がこの問題に携わったわけですが、マルクス自身が単純再生産の想定を拡大再生産にも適用しようとしてこの「困難」に出会うわけです。「一つの新しい問題」の解決に充てられたのが、いわゆる「出発表式」でした。ここでは追加労働者は労働が始まってから徐々に賃金を後払いされ、その賃金でもって今期の期首にある年間生産物のうち在庫として存在する v 部分を購入し、したがって、生産が終了すると同時にすべて販売され、貨幣化される、というようにして問題の解決をはかったわけです。「出発表式」でこのような解決をしたということ、つまり、単純再生産の場合の想定とは違った想定をした、ということが分かったのは、第8稿を見て初めて明確になりました。それは表式の展開の中で「商品在庫で」とか、「貨幣で」とかいう書き入れがなされていたからです。現行版では一部省略されていて、通常では注意がこのように向くことはなかったと思います。ですからまた、「いわゆる拡大再生産の困難」として長期にわたって論争が続いたのだらうと思うのです。なお、通常第二例といわれている表式も解決すべき独自の問題のために作られているのだということは、先の八尾氏に対する批判の論文でも、また、「『単純再生産から拡大再生産への移行』についてのエンゲルスの書き入れをめぐって——『移行』問題の核心はなにか——」でも書きましたので参考にしてほしいと思います。

Ⅳ 『資本論』第三部第1草稿の研究と恐慌論

A) 第8稿の厳密な解釈によってマルクスにもとづいて従来の議論をねじれを正し、また見当外れのマルクス批判をマルクスの立てた問題を明らかにすることによって批判されるという先生の今の話からも、我々がこれから『資本論』の草稿にあたる場合にどのような読み方をする

べきか少しわかってきたように思います。もっと二部三篇についてもお話をお聞きしたいのですが、時間もおしてきましたので、三部三篇に関連する諸論考のほうに移らせていただきたいと思います。三部三篇についても先生のご研究は『レキシコン』編集の際には久留間先生が手にすることができなかった、第三部の主要草稿、すなわち「第一草稿」をもとに、三部三篇と恐慌との関連について研究を進められています。まず、「第一草稿」研究の苦労話などからお話しただければと思います。

前畑) 先ほど『資本論』第二部第三篇の第8草稿についてお話をしましたが、マルクスの思考の流れが現行版では必ずしも十分にはつかみ切れなかったのですが、草稿によってそれが可能になった、という経験をしました。一方、第三部第三篇についても、現行版の内容については一字一句が論争のタネになっているような状態でしたので、その草稿を見るまでは現行版ではなにかモノを言えないそんな感じがしていました。そうしているうちに1992年にこの草稿が入っているMEGA / 4.2が刊行されましたが、もちろんドイツ語ですので、十分に検討するためにはこれを一度翻訳しておかなければなりません。語学が苦手の私としてはこれには文字通り苦労しました。しかし、とにもかくにも現行版との相違を注記しながら、ひと夏かかって翻訳をし、内容把握に努めたわけです。

H) 草稿を読まれた印象はいかがだったのでしょうか。現行版と比較してというか。

前畑) そうですね。従来の議論で取り上げられていた諸問題についての草稿の記述、その現行版との相違については、MEGA / 4.2の刊行以後徐々に明らかにされてきました。それは現行版では削除されていたマルクスの記述でした。その一つは、この座談会の初めのほうで問題になった「資本の絶対的過剰生産」についてのマルクス記述です。すなわち、そのような事態は現実にはあり得ない事態なのだ、という主張に対して、マルクスがこの事態に近づくということは恐慌を引き寄せることだ、という内容を述べているということ。その事態は現実にはあり得ない事態なのだ、という主張は少なくともマルクスのものではないということが明らかになったわけです。また、草稿にみられる新しい記述としては「現実の資本の過剰生産」についての記述、そしてまた、信用の取り扱いについての記述なども注目されていました。そして、これら一つ一つは従来の議論とのかかわりでも、またこの篇全体を考える上でも、非常に重要な意味をもっていました。それとともに私にとってありがたかったのは、とにかくこの篇の全体の流れをマルクスの草稿で見ることができるということでした。マルクスの草稿ですから当たり前のことなのですが。その草稿は現行版のように章区分、節区分、そしてそれらの表題がなく、「資本主義的生産の進行における一般的利潤率の傾向的低下の法則」という「第3章」のただ一つの表題をもつ草稿だったということです。もちろん一つの内容的区切りを表す記号「I」が文章の冒頭のところどころにつけられていますから、そこをひとまとまりとして読むことができます。そしてその区切りがエンゲルス編集における現行版と微妙に異なっている、何行か前後に移動させられたりしている。草稿はこうした現行版の表題や区切りに惑わされる

ことなく、全体の流れを、マルクスの思考の流れを読むことができること、これが何よりうれしいことでした。特に現行版の15章部分、3節に区分されている内容、その内容とこの法則そのもの（現行版で言うと第13・14章部分）との関連はどのようなものか、これを考えるときに、草稿研究は大いに役立ちました。これらのことは、2007年に出された『21世紀とマルクス』（桜井書店）におさめられている「利潤率の傾向的低下法則と恐慌——『資本論』第三部第15章の主題との関連で——」に書きました。今読むといろいろここはこうではないかと思うところはあるのですが、15章全体の流れについてはそこでの解釈でよいのではないかと思っています。

H) 先生の第三部第三篇と恐慌とに関する諸論文において、この法則と恐慌との関連を切断してしまうような諸説に対して、それらの説は、この法則の第2の内容、すなわち利潤率の低下には利潤量の増大が伴うという、いわゆる「二重性格の法則」についての認識が欠如しているからだ、という批判がたびたび見受けられるように思われるのですが、「二重性格の法則」を正確に理解できないところから生じる理論的弊害、また、「二重性格の法則」をしっかりと理解することで掴める点というのは何でしょうか？

前畑) 「二重性格の法則」を理解できないところから生じる理論的弊害のほうですが、例えば、資本の絶対的過剰生産とこの法則との関連を考えた場合に、この法則が利潤量の増大を、したがって加速的蓄積を伴うということを考えないとすれば、それは資本の有機的構成が高度化するということ、すなわち労働力についてみればその排出だけが問題になります。周知のことかと思いますが、資本の絶対的過剰生産とは、搾取すべき労働力が極限まで雇用されて賃金が上昇するということによって、すなわち搾取率の低下による利潤率の急落という事態であって、これをマルクスは恐慌の「一契機」であるとしていたことは先ほども話題になったところですが、労働力の吸収なくしてはこの事態は生じえません。したがって、法則を利潤量との関連を切り離して把握するとすれば、資本の絶対的過剰生産は、この法則とおよそ関係のないものとして扱う他はなくなります。実際、資本の絶対的過剰生産を重視する宇野氏もまたその対極に立つ資本の絶対的過剰の否定論者もこの法則に関しては同じ把握に立ったのです。ですから、質問の「二重性格の法則」を理解することでつかめる点とは何かといえば、ここから言えばそれは、低下法則と恐慌との関連が、その「一契機」たる「資本の絶対的過剰生産」との関連が把握しうる、ということになると思います。

H) それは「競争戦」を媒介として把握する、ということでしょうか。

前畑) 「媒介」として把握する、ということの意味ですが、先ほども言ったように、「資本の絶対的過剰生産」という事態は労働力の吸収が強く、労働力の価値から価格が上昇乖離し、利潤を侵食する、その結果、追加資本を投下しても社会的には利潤量（＝剰余価値量）が増大しないという状態、あるいはそれがマイナスにもなってしまう、そういう事態です。これは資本と労働との競争の問題ですが、しかしいつでもあるそれではなく、時々生じる、つまり、恐慌の「前触れ」として時々生じるわけです。そうすると、時々生じるこうした事態が、価値から価

格の上昇乖離を急速にもたらすこうした競争戦がなぜに生じるのか、そしてまたこの競争戦の性格を説明しなければなりません。これをマルクスはこの「二重性格の法則」から説明している、と考えられるのです。労働生産性の上昇による利潤率の低下には利潤量の増大が伴う、といってもそれは社会的総資本においてもまた個別諸資本においても加速的蓄積がおこなわれなければ生じえないことは自明でしょう。そしてまた、第13・14章での法則そのものについて明らかにした後に、この法則がどのように現われるのか、種々の観点から明示している現行版第15章第1節部分でマルクスが言っていますように、この加速的蓄積は資本の集中を伴い、前貸資本の膨大な集積として現れます。このことは、加速的蓄積の速度はその資本が得られる利潤量に依存するという、したがって、前貸資本の小さな既存資本にとっては十分な速度での蓄積、すなわち一般的利潤率の低下が生じても利潤量は増大することができるような前もっての蓄積を遂行できないという事態が生じる、ということ。したがって、こうした資本にとっては、一般的利潤率の低下に直面して改めて利潤量の増大でその率の低下を埋め合わせるようなことが可能になるような前貸資本の増大を図らねばならないということが生じてくるということ。さらに、この法則が「二重性格の法則」であるが故に資本の集中と膨大な集積として現れるということは、同時に、各生産部門で資本として運動するに必要とされる、最低資本量を増大させるということ、低い利潤率と増大した最低資本量。このことは、新たに資本として運動しようとする新資本にとっては自立するには高いハードルとなるということ。つまり貨幣資本としてとどまらざるを得ない。これがプレトラとして信用膨張の一因となる、等々。これらによって再生産過程の弾力性が極限まで緊張させる事態が生じてくることになる。概ね、こうしたことが競争戦を惹き起す諸契機だということができると思います。これらの諸契機は、加速的蓄積を伴う労働生産性の上昇の結果としてはじめて生じうるものであるわけです。通常理解では、競争戦といえば、損失の分配の競争、すなわち、資本の絶対的過剰生産の事態での競争戦だけを問題にするのですが、その事態に至る、つまり、利潤量は社会的には増大するが、これ以上は増大することができないという事態をもたらす競争戦を看過してしまっていると思います。それはこの法則が「二重性格の法則」であるということの理論的含蓄の十分なる検討の欠落にあると思うのです。

H) 従来研究では二重性格の法則の十全な理論的含蓄を理解することができなかった理由として、この法則というものを率の低下を量で補う「補償」行為の結果としてこの法則が成り立つのだ、というように理解されていた、といことを先生の論文にあったと思うのですが。

前畑) そうですね。この「補償」行為によって社会的に利潤量の増大が可能になるのではないのです。こうした考えでは論理的には資本主義的生産において労働の生産性上昇そのものを否定する議論になってしまうということをして2001年の論文(「利潤率の傾向的低下法則」と「資本の絶対的過剰生産——恐慌研究の一論点——」)で書きましたので、覚えていておいて下さった方もいるかと思えます。生産力の発展はより多くの利潤の獲得のために行われるのだ、とい

うこと。したがって、利潤を増大させないような生産力発展のための投資は一般に行われないうこと。そしてまた、加速的蓄積のための物的条件および人的条件は生産力の発展それ自体が生みだしてくるということ。つまり、生産力の発展が社会的に行われ、一般的利潤率の低下として現れるときには同時にそこには社会的には利潤量の増大が伴っているわけです。この事態を企業家は一個当たりの利潤は削っても大量に商品を販売することによってその埋め合わせをするのだ、つまり、薄利多売として意識することになるとマルクスは言っています。利潤量の増大が望めないときには、もちろん蓄積も（設備投資も）、生産力の発展も低位なものにならざるを得ないでしょう。90年代半ばからの日本の状況はまさに、こうした状態に陥っているわけです。売上高は伸びず、したがって設備投資も減少し、利潤量も増大しない。ではなぜに売上高が伸びないのか。その大きな要因として、これも久留間恐慌論の特質の一つとして挙げてよいかと思いますが、あらたな産業循環の開始は、資本が運動しうる利潤率に回復する見込みがあって始まるのですが、しかしこの見込みは価値破壊によって利潤率の低下に反対する諸要因が生みだされることによって自動的に生まれるわけではない、ということと関連する問題だと思っています。利潤量は個々の商品に含まれる剰余価値以外にあり得ないのですが、それは市場で実現されて初めて剰余価値として、利潤として実現されるわけです。したがって、先ほどの利潤率の回復が期待される、ということは同時に、新たな市場が開発されるとか、新使用価値が生みだされるとか、技術的革新がおこなわれるなどの「アンシュトース（衝撃）」によって利潤量の獲得の見込みがあって初めて現実のものとなると考えるべきではないかと思っています。90年代半ばからの日本経済の状況はこうしたアンシュトースの欠落にその一因があると思います。それは一般に言われるように労働生産性が鈍化しているからではなく、その十分な発展によってこうした事態が生みだされているということが出来ます。「アンシュトース」となるような商品は基本的には必需品です。その必需品については十分に生産力が発展した。そうすると、例えば今まで100の資本がこの必需品の生産に携わっていたが、生産力の発展によって50の資本でよい、ということになったとすれば、後の50の資本の投下先はどこに行くのか。この過剰資本は海外に流れ、そして国内での雇用の減少・失業者の増大という典型的な過剰資本と過剰人口との併存の事態が生じるわけです。国内で稼働するには与えられている利潤率が低すぎるのです。資本が運動するには労働力の価値以下の労賃によって搾取率を高め、利潤率を上昇させる以外になくなってしまっている、非正規労働者が就業者の3分の1を占めるという事態、膨大な相対的過剰人口を生み出している現状はこのようなものとして考えることができると思っています。

A) 生産力の発展と加速的蓄積との関連の話から日本経済の現状の話にまで及んでしまいましたが.....。

前畑) 話が飛んでしまってすみません。(笑)

A) いえ、日本の現状について、いろいろお話を伺いたいと質問も予定していきたくのですが、

先生の主要研究の三部三篇と恐慌についての先生の諸論文の個々の内容に関連する質問もまだあるようですので、それについて若干お話しただいてからにしたいと思います。ただ、時間的にも、多分、これを原稿に起こした時の字数からみてもだいぶオーバーしてしまうのではないかと危惧されますので、どうしても聞いておきたいことがあればそれにお答えいただくということで、切り上げさせていただきたいと思います。では、質問をどうぞ。

B) 先生の論文を読んでいますと、恐慌論について書かれた他の方の諸論文にはあまり出て来ないと私には思われる「資本の減価」についての記述が目につくのですが、しかも、「事実上の減価」とか、「周期的減価」とか、いろいろ出てきます。この「資本の減価」の問題のポイントというか、恐慌を論じる際の位置づけというか、この辺について簡単にお話しただければと思います。

前畑) 簡単に話ができるかどうか。まず第一に、「資本の減価」という問題のポイントは、労働の生産性にかかわる問題です。価値はその商品の生産(再生産)に社会的に必要な労働時間によって規定されます。したがって、例えば以前には1000万円した機械が労働の生産力が増大し、現在では500万円で生産することができる、ということになれば、その機械は500万円の価値をもつものとしてしか評価されません。1000万円したのだからその分を生産物に価値移転しているのだ、したがって、その値段で、例えば以前はこの機械を使って一個当たり100円で販売していたとして、100円で今も売れるかということにはいけません。機械の価値そのものが「減価」しているわけですから以前と同じく生産物に価値を移転する、ということにはならないからです。不変資本 c が減価するわけですからその限りで利潤率が上昇し、新資本にとっては好都合ですが、既存資本にとっては増殖すべき資本価値の喪失であり、一定の価格を前提している再生産過程の攪乱が引き起こされる可能性が出てくるわけです。既存資本の価値の維持とその増殖とをその運動の目的としている資本主義的生産にとって、その目的を達成するための手段である労働の生産性の上昇が利潤率の低下=資本価値の増殖率の低下を惹き起すと同時に、既存資本の「減価」=資本価値の喪失という資本にとっての制限を生み出さざるを得ないのです。そして、マルクスは恐慌とは既存資本の「周期的減価」によって生じる再生産過程の攪乱であるとしているわけです。つまり、すでに生み出された生産諸力を価値破壊する=既存資本が「周期的減価」することによってしか、資本としての運動を継続することができなくなるのだ、それが恐慌だと考えていたわけです。したがって、この「資本の減価」という概念は、恐慌を問題にする場合に非常に重要な概念だということができます。なお、資本の絶対的過剰生産のところでは、マルクスは「資本の事実上の減価」という言葉を使っていますが、これは、例えば、従来1000の資本が10の利潤を生みだしていたとして、それが今度は5の利潤しか得られなくなるとした場合、この資本は、「事実上」、500の資本に「減価」したのだ、とこのような意味で使っています。こうした「減価」に見舞われた資本が具体的にどのようなものとして現れるか、それは操業を停止した状態で、資本としての運動を停止した状態で存在することに

なるでしょう。そしてそれは再生産過程の攪乱を意味するでしょう。蓄積率が $+α$ から 0 への急速な低下が生じ、部門 への過剰 部門 への需要の減退 部門 での過剰 部門 への需要の減少等々。再生産過程の攪乱は必至です。簡単に話せたかどうか。

B) 「資本減価」の意義といいますが、少しわかった気がします。

C) 先生は「第一草稿」にもとづいて、「利潤率の傾向的低下法則」と「資本過剰」「商品過剰」の関連を取り上げ、従来の「資本過剰論」「商品過剰論」とは異なった理解を示した論文をお書きになっていますが、そのポイントをかいつまんで言えばどういうことになるのでしょうか。そして、また、この問題についての従来の見解の問題点は端的にいえばどのようになるのでしょうか。お聞きしたいと思います。

前畑) ここではこの問題を考える際のポイントをいくつかあげるといことで、その内容は論文自体を読んでほしいと思います。先ほどお話をした競争戦のところで、マルクスは「……この競争戦は労賃の一時的上昇を伴い、またこの事情がもたらすより一層の利潤率の一時的下落を伴っている。同じことは、商品の過剰生産、市場の供給過剰にも現れる。……」といっています。すなわち、この競争戦は剰余価値の生産の条件も、またその実現の条件も悪化させるのだ、と述べているわけです。ではこうした事態になるのはなぜか。ここでまず確認しておくべきことは、「この競争戦」といっているのは加速的蓄積と労働の生産力の発展の結果として生じる利潤率の低下が引き起こす「競争戦」であるということ。第2にこの競争戦が労働力を急速に吸収し、「労賃の一時的上昇」を惹き起し、搾取率の低下から生じる「より一層の利潤率の一時的下落」を惹き起すこと。第3に労働力の急速な吸収に表れているような再生産過程の弾力性を極限にまで緊張させるこのような競争戦は、「商品の過剰生産、市場の供給過剰」を生み出すことになるということ。さらに付け加えるならば、先ほど見たように、この競争戦の性格は信用膨張のもとで投機的な資本の運動および思惑的生産を伴う過程であること。これらは再生産の限度そのものを拡張させるとともに過剰生産を隠蔽するものであるということ。これらのポイントから見えてくるのは、商品の過剰は資本の過剰の結果であるとか、またその逆であるとかいう問題はたてられていないということです。それらは同じ競争戦の産物だ、といっているわけです。それはどのようなことか、この競争戦は労賃を一時的に上昇させるほどの蓄積を個々の資本に強制するからだということになるでしょう。それは「より一層の利潤率の一時的下落」を惹き起す過剰な蓄積です。労賃の上昇はそれ自体がさらなる生産拡大へと資本を駆り立てます。それがまた搾取率を低下させ「より一層の利潤率に一時的下落」をもたらすということは言うまでもありません。搾取率の低下から生じる利潤率の低下のもとでも利潤率を増大させるということが資本として生き残る必須条件であるとすれば、これまた蓄積が加速せざるを得ないでしょう。膨大な商品量が市場に排出されますが、それらは投機的な資本の運動、そして思惑的生産によって隠蔽され、しばらくは経済の絶好調が続きます。恐慌の前の局面である「過剰生産期」の状態ですが、なぜこうした事態に至るのか、これをマルクスは、利

潤率の傾向的低下法則の展開の中に位置付けている、ということが肝要かと思います。従来の議論における資本過剰論、商品過剰論そのいづれにしてもそれらの多くがこの法則と切り離されたところで論じられるということに共通点があると思うのですが、それらの問題性というのは、資本主義的生産の特質をなすところの労働生産性の上昇を軸として恐慌を把握することができないということ、恐慌とは一般的にいえば、資本主義的生産関係とそれが生みだす生産力との矛盾の爆発であるとマルクスは考えていたと思うのですが、この観点からの把握が希薄にならざるを得ないということだと思います。なぜなら、労働の社会的生産力の絶え間ない発展を表す資本主義的生産様式に特有な表現がこの法則だからです。前にも言いましたが、この問題を考えるときに、例の第二部の注³²の内容をどのように考えるべきか、まだ、十分に、これだということに行きついていません。この点、諸草稿を踏まえて、検討したいと思っています。

V 講義の話

A) 私の研究テーマは現状分析のほうに重心を置いたものですが、恐慌の問題についての理論的把握を自分のものとしていく努力を怠ると、肝心の現状分析もただ資料の羅列で「分析」を成し遂げたような気分になってしまう恐れがあると常々感じています。今日の最初のほうの久留間恐慌論の特徴の話も含めて、いままでの先生の研究についてのお話をうかがって、個々の論点について今まで十分に考え抜くという作業をしていないということもあって、十分に分かったという具合にはなかなかいかないのですが、少なくとも恐慌の分析にあたって欠くことのできない視点というものについての理解が深まったように思います。質問もまだあるかと思いますが、この後、先生には講義のことについてもお話をしていただきたいので、質問のある方は、「二次会」(笑)でおおいに議論してください。

先生は1996年4月に立教にいらっしゃられて、それ以来、経済学部で経済原論A(経済学科では必修講義)を担当してこられたのですが、その間、教育環境も大きく変わられたと思います。その辺の話からいかがでしょうか。

前畑) 教育環境の変化は大きいものがありましたね。なにせ最初に赴任した時の受講生は確か800人近くであったと思います。9号館の大教室でした。小さな黒板一つで、後ろのほうの人はオペラグラスで黒板を見ている状態でした。そこで価値論からはじめるわけですから、最初の2、3年は講義の進行をどうするか、これで頭がいっぱいという状態でしたね。そのうち、皆さんもご存じのことと思いますが、経済学部の大橋先生が総長になられ、そしてそのスタッフに多くの経済学部の先生方が朝から晩まで大いに働いた。そのおかげ(?)で教育環境が大きく改善して、受講者数だけからみても4分の1近くの受講者数での必修の講義が可能になったのです。それだけでなく、講義の質を高める施策が取られ、例えば、ここにいる皆さんにも

講義準備および講義補助等でおおいにお世話になりましたが、TA・SA 制度もできました。皆さんに助けられて、リアクションペーパーを毎回受講生に課すこともでき、これが次の講義の準備に大きな役割を果たしてくれました。その間、講義ノート皆さんの力をも借りてできましたので、練習問題や課題など、大教室では多分できなかったであろうことを学生の学習の補助として課すということもできたわけです。学生の評価は残念ながら特にいいというわけではありませんでしたが、私としては気持ちのよい講義の進行ができたと思っています。

C) 先生の研究テーマとかかわるのですが、久留間先生がなされたように先生も『資本論』を恐慌論の基礎理論として読まれていると思うのですが、講義の時にもやはりそのような捉え方、つまり、資本主義はどのような形で行き詰まるのかとか、どうやって周期的にいろんな矛盾が累積するのか、そういう視点で、原論も組み立てられたのでしょうか。

前畑) それはそうですね。サラリーマンとして働ける期間はだいたい30~40年ですね。その間安定して働いていける、という具合にはいなくて、産業循環の波にさらされるわけです。特に学生にとっては循環のどの局面に就活の時があたるかによって、人生が左右されるほどの状況になる。ですから、学生にとっても、そしてこれからの生活を考える上でもなぜ、我々の社会では経済が安定的に発展を遂げるのではなく、このような変動の中で進んでいくことになるか、この問題についての関心はやはりもたざるを得ないだろうと思うのです。経済原論の講義は立教では1年間ですから、この期間に『資本論』を基礎とした講義をするという場合、何を軸として、講義を組み立てていくのか、ということは非常に重要になります。それはまた、何を知ってほしいか、ということでもあるわけですが。そこで、資本主義的生産様式の基本的な構造はもちろんですが、そこにおける生産力の発展が我々の社会の種々の問題をいかに生み出さざるを得ないのか、相対的過剰人口の問題もそうですし、また、利潤率の傾向的低下法則もそうです。そしてまた恐慌もしかりです。つまり、資本主義社会における労働の生産性の上昇をキ 概念として講義を組み立ててきたというわけです。

C) 学生にマルクス経済学、とくに原論を教える場合、いろんな切り口があるんですが、やっぱり資本主義はどうやって矛盾が累積していくのか、動態的に、どういう風に爆発するのか、そこを基軸にして原論を教えるという意識をもつというのが、先生のポリシーとしては大事なのではないかという風に思うのですが。原論を教えるベースとして。

前畑) そうですね。資本主義的生産の運動法則ですね。これを論理的にきちっと考えられる、自分の頭で考えられる、つまり、いま自分が立っている社会の歴史的な位置を自分の頭で論理的に考えることができる、その基礎を原論の講義で養ってほしいと思っていました。これは自分が感じたことでもあるのですが、高校時代や大学時代、とくにいろいろ動いていた高校時代に一番感じたのですが、例えば、資本主義の矛盾をいろいろ敏感に感じているような運動にかかわり、一生懸命活動する。しかし、実際に働いているわけではありませんから、非常に観念的です。その時はそう思いませんが。しかし、実際に社会に出て働いたときに、本当に今の自分

を維持できるだろうかと非常に心もとなくなることがありました。それは現に働いていない、ということもそうなのですが、しかし、やはり自分で自分が生きている社会を分析できるその基礎をもっていない、借り物だ、ということであったということが大きかったように思います。ですから、勉強しよう。こんな経験から、社会に出ても自分がどのような歴史的 position にいるかを自分の頭で考えることができる、その基礎的訓練の一端を経済原論で担えたら、と思ったのです。そういう講義を提供できたかどうか、これまた非常に心もとないのですが。

おわりに

(以下、文責：堀内健一)

長時間にわたりお話を頂きましてありがとうございました。この機会に際し改めて先生のお人柄と学風・学問の内容について知ることとなりました。

先生が研究の対象とされてきた恐慌 (Krise) は、わたしたちが生きている資本主義社会に潜むあらゆる矛盾の凝縮した現れであるという点で、そして現に2008年秋以降の先進資本主義諸国の多くの人間がそのことに直面しているという点においても最大のテーマだと思われます。先生は「大きな疑問」をもつことの大切さと面白さをわたしたちに折に触れて——学部での講義や大学院でのゼミや飲み会、そしてこの場でも——説かれてきましたが、そのまさに「大きな疑問」にふさわしい課題を設定しうる、そしてそれに答えうる手がかりが横たわっているのが、先生ご自身の学問領域であるマルクス恐慌論であると思います。

しかし、「なぜ時として恐慌 (あらゆる矛盾の集積的爆発) はおきるのか」、「恐慌を繰り返して長期的には資本主義はどこにいくのだろうか」という問題を立てたときに、私たちの生きている社会を歴史的に相対化しその特質を冷静に考察すること、資本主義的生産のあらゆる諸契機を分析し総合すること、私たちの社会での富である商品に含まれる矛盾から出発し、資本の価値増殖運動がそれ自身の増殖率低下を生み出し、結局は自分自身を破壊するという矛盾の展開までを追究し尽くすこと、資本主義世界の現実の動き——競争と信用を含む——を絶えず総合的に捉えることによって、はじめてその課題が果たされるという点で最も困難と苦心が伴う領域であると思います。

そして、恐慌の基礎理論の体系でもある『資本論』を読んでも、その現行版ではよく内容が理解できない。学界においてもたいていは『資本論』の誤読に起因する論争がおこなわれているのであり本当の理解へなかなかたどりつけない。つまり「大きな疑問」を解く手がかりとなるものについても、疑問だらけで、二重、三重にも困難がつきまとっている。そのことが研究史における通説への批判、草稿研究の成果にもとづく恐慌への新たな理解の提示という先生の仕事につながっていったのだと思われます。

この座談会でも明らかになりましたが、先生の一連の仕事で貫かれていることは、マルクス

の課題設定——マルクスの真意——を読み解き考え抜くことで問題を解いていくという態度があります。このことは次の先生のことばにも現れています。「『資本論』を研究するということは、通説を理解することではないし、また、『資本論』に関する諸論争の間を行き来することでもない。それは、ごまかしなしに『資本論』と格闘することでしかあり得ない。」この研究態度はまさに先生が深く傾倒されてきた久留間鮫造先生の態度そのものであると思われます。前畑先生の仕事について語る上で久留間先生の研究態度とその結実である『マルクス経済学レキシコン』を抜きにして考えることはできません。そして、大谷禎之介先生のマルクス草稿研究の緻密で膨大な成果は、学界での『資本論』研究を新たな段階へ進化させ、草稿研究にもとづく「利潤率の傾向的低下法則と恐慌」との関係の論定という前畑先生の見事な最新の成果へとつながっていったのだと思われます。

どのような形でも、『資本論』と関わることは格闘なのであるから「しんどい」。しかし、しんどい時、困ったときにはいつでも『資本論』に立ち返るのだと先生はよく言われます。やはりマルクスの課題意識、真意をつかむのは難しいが、それをつかめばいつでも道が切り開かれるということでしょうか。読んで目の前の霧が晴れる思いをする論文とはこのようにして書かれるのだと知ることができました。

前畑先生からは、これ以外にも実にさまざまなことを学ばせていただきましたが、先生の研究態度をできるだけ自己のものとし、『資本論』との格闘を続けるなかで、できるならば霧の晴れる思い、わくわくする思いを目指していきたいと思います。立教大学でこれまでご指導を賜り誠にありがとうございました。願わくば「本当のことを明らかにする」学問をこれからも学ばせて頂きたいと存じます。